

☆映画「魔法のナイン」は今まさに製作中!

制作の背景 前田真吹(しづき)さんHPより

2003年、私は、アフガニスタンの首都カブールの避難民テントに立っていた。

学生時代から写真や映像製作に熱中していた私は、ひよんな縁で、ドキュメンタリー映画の監督と出会い、たまたま参加する流れとなったのだ。このアフガンの初渡航が、私の人生を変えるとは思ってもよらずに。

アフガニスタンは、疲弊していた。911事件のアメリカによる報復爆撃。長年の内戦による、廃墟の群れ。そして、深刻な干ばつ。

家のない避難民たち・物乞いが、あふれていた。撮影は無事終わり、帰国後、映画は無事、完成を迎えたが、その後も割り切れぬ思いが私を覆った。

一番ショックだったのは、水だった。

濁った水を回しのみする子どもたちの姿。避難民テントの中を覗くと、一枚の絨毯以外、何ひとつなかった。子供たちの腕を触れば、一様に木の棒のごとく、人間の骨とは、到底呼べるものではなかった。服は、汚れて破け、裸足だ。家もなく、綺麗な水すら、ない。そんな過酷な環境ながらも、私たち外国人に、屈託なく、微笑んだ。

この避難民テントに動めく、無数の人達の光景は、私が、今までの人生で目にした「最強の暴力の構図」だった。彼らは、元々は、当然、持っていた。安心・安全な暮らし。暖かいおうち。お父さん・お母さん。

それを、奪った人間たちが、この世界にはいる。アメリカは、世界一、裕福な国です。そんな国が、最新兵器とミサイルで、こんな国を、攻撃していたのです。

ニュースでは、知り得なかった現実だった。そして、わたし達の国、日本も、この戦争を支持し、加担している。私たちの税金によって。

帰国後、私は、当時住んでいた、神戸の路上で井戸掘りの募金を、集めはじめた。911後、早くも「アフガニスタン」は、日本の報道から、姿を消していた。多くのニュース同様、無関心の忘却のふちに。

どんなに小さくても、伝えなければ、と思った。私は、今までの自分の無関心を反省していた。活動を続ける内、少しずつ、協力者が現れ、たくさん善意に助けられ、約半年で目標の100万円に達した。

まだまだ治安の安定しないアフガニスタンで、素人の自分が井戸掘りプロジェクトを行うのだ。周囲に迷惑をかけない為に、遺書も書いていった。誘拐のターゲットになりうる。自爆テロ事件も、急激に起こり始めた。そんな状況下、素人の自分は、何の実益も、現地でもたらせないばかりか、協力してくれるアフガニスタン人の命も、危険にさらす可能性まで生む。

友人に会えない。これも、戦争の大きな弊害だ。「国が違う」だけで、「国と国の関係」で、私たちは、会いたい人達に会うことができない。平和がいい。平和がいい。

そう地団駄を踏むある日、日本の戦争体験者のK

さんに、出会った。Kさんは、幼少時に体験した、高松空襲の体験を、語り継いでいる方だ。

私は、自分の足元を、あまりにも知らなかった事に気づいた。(「世界平和出版 1945年7月4日」と書かれたプラカードを持ち、高松空襲の惨禍を訴えるKさん)



私は、日本の過去の戦争を調べ始めた。広島島の被爆体験者や、高松空襲の体験者から、凄まじい経験を聞いた。そこには、私の全く知らない「日本」があった。戦争が、私たちの日本にもたらしたものだ。それは何だったのか?教科書では、教わらなかった日本を、今、もう一度、見つめたいのです。

戦後63年戦ってこなかった日本。

おりしも、2010年5月以降、平和憲法の9条を変えるための、国民投票が、行われる。結果によっては、日本も、また、戦争に参加する国になる。彼らの想いに、もう少し耳を傾けるべきだったのではないかと、撮影前から、私は深く恥入っている。知らなくて、ゴメン。

アフガニスタンの泥だらけの避難民の子どもたちと、高松空襲で、家を焼かれ、炎の中、命からがら逃げ惑った、今は75歳のKさんの顔が、ダブった。